



馬の鼻向けとして

ご卒業、ご修了おめでとうございます。

大学生活は、いかがだったでしょうか。

若いエネルギーを真っ白な灰になるまで燃やしたでしょうか。それとも、まだやり残したことがあったりするでしょうか。十人十色のドラマがあったことと思いますし、学べば学ぶほど不足に気づくことは、斯界の「あるある」ですが、時間というものは誰にでも平等に過ぎ去るもので、いよいよ旅立ちの時となりました。

李白は「光陰は百代の過客なり」（春夜宴桃李園序）とし、芭蕉は「行きかふ年もまた旅人なり」（奥の細道）と記しました。

卒業シーズンになりますと、真壁仁の「峠」（日本の湿った風土について）という詩がよく話題に上りますが、真壁は「峠は決定をしいるところだ。峠には訣別のためのあかるい憂愁がながれている」とし、「ひとつをうしなうことなしに別個の風景にはいつてゆけない」としています。

卒業という人生の節目を迎える心境は、旅の途中で峠を越える心境に似て、希望の光に満ちているはずの心の片隅で、言い知れぬ寂寥を感じてしまうのは、時の流れによる強引な訣別により引き離されたものが存在するからでしょう。

峠の先に広がる景色に対しては、新たな期待に夢が膨らむ一方で、未知なるが故の不安に心がしばむこともあります。

その不安を打ち消せるのは、振り返った道に刻まれた自身の足跡のみで、例えば、授業で書き溜めたノートの一頁一頁は、坂道を一步一步上り続けた足の痛みの記録であり、一日一日、確かに歩を進めた道程を書き留めたカレンダーです。

過去に訣別する前に、一度、学生時代のノート、赤線を引いた論文のコピーを積み上げてみてください。その高さは、入学当初のステージから自身を押し上げたことのある確かなエビデンスとなって、ひるみがちな心を支えてくれます。

現代社会は変化の速度が著しい時代のように、殊に、コンピューターに代表される科学の進歩は著しく、レイ・カーツワイルは『The Singularity Is Near』において、2045年には1000ドル程度のコンピューターの性能が全人類の知能をはるかに超え、人間の生活が劇的に変容する「特異点 (singularity)」を迎えるとして、世間の耳目を集めました。

ただ、従来の価値観に基づいた人の努力が技術革新によって無価値になる皮肉な話は、例えば、星新一の「空への門」で語られていますし、「人間が想像できるものはいずれ現実化する」は、出典不明のようですが、SF作家ジュール・ベルヌの言として有名です。文学畑の人間としては、「特異点、さもありなん」といったところでしょう。

大方のことは、過去に学び、先人の足跡を分析すれば、右を選んだ未来、左に進んだ未来を予測可能にし、未知であるはずの事象を想定内に置くことができます。

さらに皆さんは、卒業論文などの研究テーマに挑んで未知の世界に分け入り、「なぜか?」「どうしてか?」といった未解決問題の解明に取り組み、「どうすればよいか?」という思索を繰り返してきました。

試行錯誤のトレーニングが自らの思考力を鍛え、全く新規の課題に直面した際にも、自力で道を切り開いていける力を培ってきたわけです。

どんな未来に直面しても、人としての立場から冷静に解決方法を模索できることが、大学生活という道を踏破した皆さんの強みだと思います。

どうぞ、臆することなく、新たな道に旅立ってください。鶴見の地よりご活躍を祈念しています。



令和8年3月14日
文学研究科長・文学部長 小林 恭治

